

For a synodal Church — communion | participation | mission

5. 宣教活動について

信徒が入門講座を担当していることもあるようですが、信徒の役割がもっと盛んになっていくことを望む声があります。司祭・修道者にお任せしてきた伝統から、信徒も一緒になって入門講座を行っていくように変わっていくことが方向性でしょうし、信徒のチーム育成が大切でしょう。

- 「講座」という学習の場であるような名称を改めるべきでは。キリスト/聖書を学ぶ会とか聖書にふれる会など。
- 「教会」という名前も適切なのか？ 神様の教えより生き方。信じる喜びを分かち合うことを大切に、名前の言い換えを考えてはどうか。
- 勉強ではなく生活を振り返る分かち合いを中心にする。洗礼準備講座とは別に、キリスト教を学ぶという入り口になる集いを開いてはどうか。教会以外の場を使って聖書を伝える講座を開いてはどうか。
- 信徒を養成(学習も霊性も)しながら、信徒使徒職をさらに内実のあるものにしていく必要を感じる。
- 「出向いていく教会」のありかたを模索する。

6. 対話する教会のあり方

地域との関係を大切にしてきた小教区もあれば、あまり意識してこなかった小教区もあるようです。

- 信者一人ひとりの実践している活動は教会から派遣されていると受け止める共通認識を持つことが大切ではないか。
- 各人には、その人でないといけないことがある(固有の召命)。職場におけるミッション、社会的霊性など。
- 社会活動は政治と結びついている。教皇の社会教説がそのことを訴えている。政治を忌避せずに、教皇の指摘をもっと真摯に受け止めるように。

7. 他のキリスト教宗派とのつながり

朝拝会、エキュメニカルな集い、市民クリスマスなどの体験のすばらしさを語る人たちがいる一方で、エキュメニカル関連の活動を経験していない人たちも多いようです。ただ、個人的にプロテスタントの友人がいる人は多そうです。

- 主任司祭の否定的な姿勢のため、長年続けてきた市民クリスマスが終了してしまった。
- プロテスタントの人と一緒に祈る集いは大切。
- エキュメニカルについての理解を深める機会をつくること。

8. 参加型、共同責任型の教会に向けて

役職が一部の人たちに偏っていることへの不満があちこちから表明されています。役割の交代の仕組みをどのように規約で定めるかが課題となっている小教区があります。また、小教区評議会の議題を事前に発表して広く皆さんの意見を受け付けるなど、風通しの良い小教区運営が望まれます。このシノドスのための準備のように、多くの人たちが意見や思いを表明し、分かち合う習慣がほしいです。

- 任期制を取り入れているところはある程度ある。問題は人材確保。信徒数の少ない教会は特に難しい。
- ブロックの中で違う小教区と行き来する。ミサ後に交流する場を持つ。
- 分かち合いの質。意見交換ではなく、ありのままの気持ちを分かち合うことが分かち合いであるという認識が大切。信徒同士の交わりは喜びであるという実感が教会を豊かにしていく。
- 信徒が前面に出なければ教会は発展しない。

9. 霊的な識別について

聖霊の導きを共同体として選び取っていくことが大切でしょう。シノドスのための準備で「セブンスステップ(分かち合いのプログラム)」を使ったように、みことばに触れて、祈りをともにささげて、信仰的なセンスで共同で決定していく仕組みが求められています。簡単ではありませんが、このポイントが入ってくると、雰囲気が変わっていくでしょう。

- 聖霊の導きをすごく特別なこととしてとらえられてしまっているように感じる。どれだけ普段のレベルに根付かせるか。
- 「識別する教会になるように」との教区からの要望に、識別の意味を「根回し」と理解している人もいるらしい。「識別とは何か」を司祭も信徒も共に学ぶ必要を感じる。
- 司祭・修道者・信徒が同じテーブルに着き意見を交わすことの重要性は、福音宣教推進全国会議(以下NICE、1987・93年開催)が目指した福音宣教の優先課題「開かれた教会」のことである。声の大きい人に合わせて付度するようなことがないように、一人ひとりのありのままの意見、考えを引き出せるような環境づくりが必要。

10. シノドス的な成長に向けて

NICEや大阪教区の新生計画では、多くの養成コースや研修会がありましたが、そこで重視されていた「分かち合い」がこの頃少ないようだと指摘があり、ともに歩む実感として、分かち合う機会を大切にすることが提案されています。今回のシノドスのための準備をきっかけにして、「シノドス運動」を活性化することが望まれています。教区としての組織的推進が必要かもしれません。

「信仰と生活の遊離」が今もってあり、「シノドス的な成長」・「共に歩むこと」と言っても、どのように歩めばいいのかわからないとの質問が寄せられていました。

- 「セブンスステップ」の有効性を多くの人たちに体験してもらう。改めて、そのための体験的な研修会を実施する。
- 「識別」「シノダリティ」とは、「イエスならどうするか」を判断することだとわかってほしい。

その他

- 信徒・司祭の養成の必要性を感じる。教皇文書などをよりわかりやすくかみ砕いて丁寧に説明する機関や機会があればいい。
- お互いに共通理解し合い、歩み寄る場が大切だが、難しい。地道に分かち合いを続けていくことが大切。
- 司祭の態度によって、その小教区の雰囲気が変わる。信仰は「教義によってではなく、神父との出会いによって福音が広がる」と言われている。日本語が拙くても、人となりによって伝わるものはあると思う。
- 外国人、いろいろな障がいを抱える人たち、困難を抱えている人たちが互いに出会い、祈り、歩めるように工夫すること。何が必要で何を希望しているか話し合う機会を持つことだと思う。
- 大阪教区では阪神淡路大震災の後、『新生の明日を求めて(1998年)』という冊子を作った。こうした努力を続けて欲しい。

C. 今後に向けて

「ともに歩む」ことができているのかを振り返るせつかくの機会でしたが、コロナ禍もあって分かち合いの場を十分に作り切れなかったことを考えると、今後の方向として、小教区、地区、教区のそれぞれの場で、これまで取り組んでいたシノドスに向けた準備の作業(分かち合い、霊的識別の探求)を「シノドス運動」として継続し、具体的な刷新を実現する方向を整えていくことが望まれます。

今回のシノドスのための準備をさらに充実させて発展させるような、教区からの働きかけが必要だと思います。地区や小教区も積極的に創意工夫していくことが期待されます。

来年のシノドスの会議の後で、その1年後くらいに教皇が使徒的勧告を出されます。その文書を熟読する機会をつくとともにその使徒的勧告をテーマにした分かち合いを進め、シノドスである教会実現に向けてともに歩みたいと思います。

シノドス担当チーム

【2022年5月18日(水) 司祭評議会承認】

Synod
2021
2023